新得町上佐幌出土の土器について

澤田　恭平*

ここで紹介する資料は、1959（昭和34）年に新得町佐幌小学校の児童が表面採集したものである。

当時、同校教諭であった向守行氏は、遺物の発見を釧路市立郷土博物館に連絡、澤四郎が試掘程度の調査を実施した。澤はこれらに大洞式土器の存在を指摘していたが（澤1963）、諸般の事情でこれまで未報告であった。

資料紹介にあたり、向守行氏、新得町内の遺物実見にご配慮を頂いた同町教育委員会岡田徳彦氏、乙井逸人氏、川畑翔平氏に深謝申し上げたい。

１　採集地の概要

本年7月に、向氏のご説明をもとに現地を確認した。採集地は、新得駅から東に2.5km、旧佐幌小学校から北西に0.8kmの上佐幌台地に位置する。

標高は約240mで、東側を上佐幌川が南流する。現在、同地は畑地として利用されており、深度耕作によって遺物を確認することはできない。

第１図　採集範囲と周辺地図

２　採集された土器

総数は269点である。ここでは口縁部破片を中心に抽出し、時期別に大別した。その内訳は、第Ⅰ群：１点、第Ⅱ群：２点、第Ⅲ群：266点である。

第Ⅰ群（1）：縄文中期前葉に相当するもの。器種は深鉢。口唇部を欠損する。内面がミガキによって調整され、粘土紐による隆帯と無節Ｌの側面押圧や馬蹄形押圧が施される。胎土に繊維を少量含む。円筒上層ｂ式に併行する。

第Ⅱ群（2）：縄文後期前葉に相当するもの。器種は深鉢。口唇、口縁部に単節ＲＬが、口縁部に竹管状工具による刺突列、沈線が施される。北筒Ⅳ式に相当する。

第Ⅲ群（3～52）：縄文晩期に相当するもの。特徴となる文様要素などから８類に細別した。

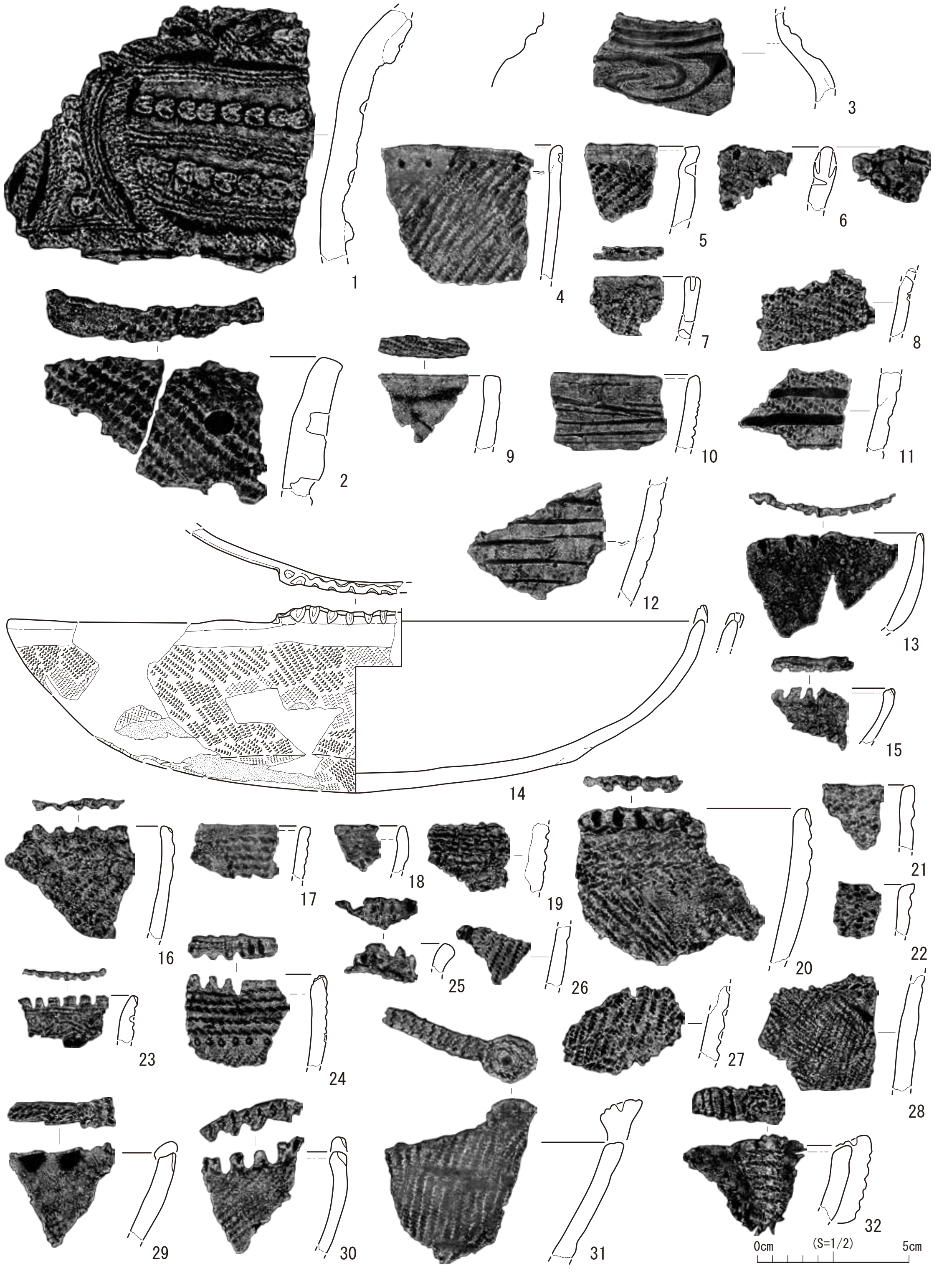
１類（3）：入組三叉文を特徴とするもの。器種は壺または注口とみられる。小振りで胴部が丸味を帯びた器形であると考えられる。頸部に平行沈線が２条、ミガキ調整された胴部には入組文が描かれる。外面はやや磨滅している。大洞Ｂ～ＢＣ式に併行する。

２類（4～8）：刺突文を特徴とするもの。器種は鉢または深鉢とみられる。刺突具は竹管状・棒状のもののほかに扁平な箆状工具によって口唇に刺突列を施すものがある（7）。５は口唇が丁寧に面取りされ、刺突によって内面に瘤を形成する。６は器面調整が粗く、内外面に煩雑な刺突文が施される。地文は単節ＬＲ、単節ＲＬのほか無文がある。

３類（9～12）：沈線文を特徴とするもの。器種は鉢または深鉢とみられる。先が細い棒状工具で平行沈線文が描かれるもの（10・12）や斜行沈線文が描かれるものがある（9）。10は器面がミガキ調整され、口唇が面取りされている。地文は単節ＲＬのほか無文がある。

４類（13～15）：口唇の刻みを特徴とするもの。器種は浅鉢または鉢とみられる。刻みは口唇外縁に棒状工具によって施され（13）、口唇上にも刺突や無節Ｌの側面押圧が加えられるものがある（14・15）。14は推定口径23.0㎝、器高6.2㎝を計るもので、４分の１周程度が接合した。丸底をなす浅鉢で、口縁部に低く横長な突起が配されるものとみられる。地文は単節ＲＬであるが口縁には無文部が意識されている。底部では施文方向を変えているため、胴部との境に弱い稜が形成されている。

*釧路市埋蔵文化財調査センター


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0cm
(S=1/2)
5cm

第２図　採集土器１

5類（16～35）：縄線文を特徴とするもの。
多くが鉢または深鉢とみられるが、片口あるいは注口付きの可能性などをもつものがある（30,33,35）。口唇付近の文様には、内縁に細い縄線文と刻みが施されるもの（24）、上面に縄文原体を連続して押圧し、突起部で渦巻状の縄線文や刺突を施すもの（31～35）がある。口縁部文様には、無節の原体による横位の縄線文が多く認められ、これを区切るように縦位の縄線文や（16・17・19）や刺突が加わるものがある（24・27）。このように本類は、縄線文と刺突などの組合せを多用し、装飾的効果をもつものが多い。地文は単節ＬＲが多く、単節ＲＬ、無文がこれに次ぐ。

6類（36～41）：沈線による格子文や渦巻状文を特徴とするもの。
器種は深鉢または鉢とみられる。37・38は先が細い棒状工具によって沈線文または格子文が描かれ、その上から渦巻状文・刺突文が加えられる。39・40は刺突文と鋸歯状文が施される。地文は無文または単節ＬＲがある。

7類（42～45）：無文・縄文のみのもの。
器種は鉢または深鉢とみられる。43は口唇が面取りされ、ミガキによって内面が丁寧に調整されている。

8類（46～52）：底部破片を一括した。52を除き、底面には回転縄文が施される。刻みと沈線文や棒状工具による刺突が加えられるもの（46～49）がある。49の外面には赤色顔料が塗布されている。

3　考察

本資料は、大半が表採遺物であり、澤による試掘データも失われていることから資料的な制約を看過することはできない。

一方、十勝地域は北海道横断道建設などを原因とする調査事例の増加により、縄文土器に関する基礎データの蓄積・編年整備の進展が著しい。ここでは上佐幌地区周辺における報告資料の充実化を図るとともに、十勝編年（北沢ほか2009、北沢2011）などとの比較検討を通して各類型の位置付けや課題について整理しておきたい。

第Ⅰ群は円筒上層式またはその影響を強く受けたもので、十勝Ⅴ群３a類である。本群は十勝地域では幕別町日新F遺跡（森内1999）に次いで２例目となる。道東部での類例としては、釧路市武佐川１遺跡（松田1998）第1号住居跡内から出土したものが挙げられる。第Ⅰ群及び武佐川１遺跡出土のものには円筒上層b式の指標とされている馬蹄形押圧が施されている。やや在地色が強い武佐川１遺跡と比較すると、どちらにも胎土内に若干の植物性繊維痕が認められるが、胎土や焼成・器面調整は本群のものが良好である。道東部において円筒上層式併行期の土器群を捉える上で良好な資料といえる。

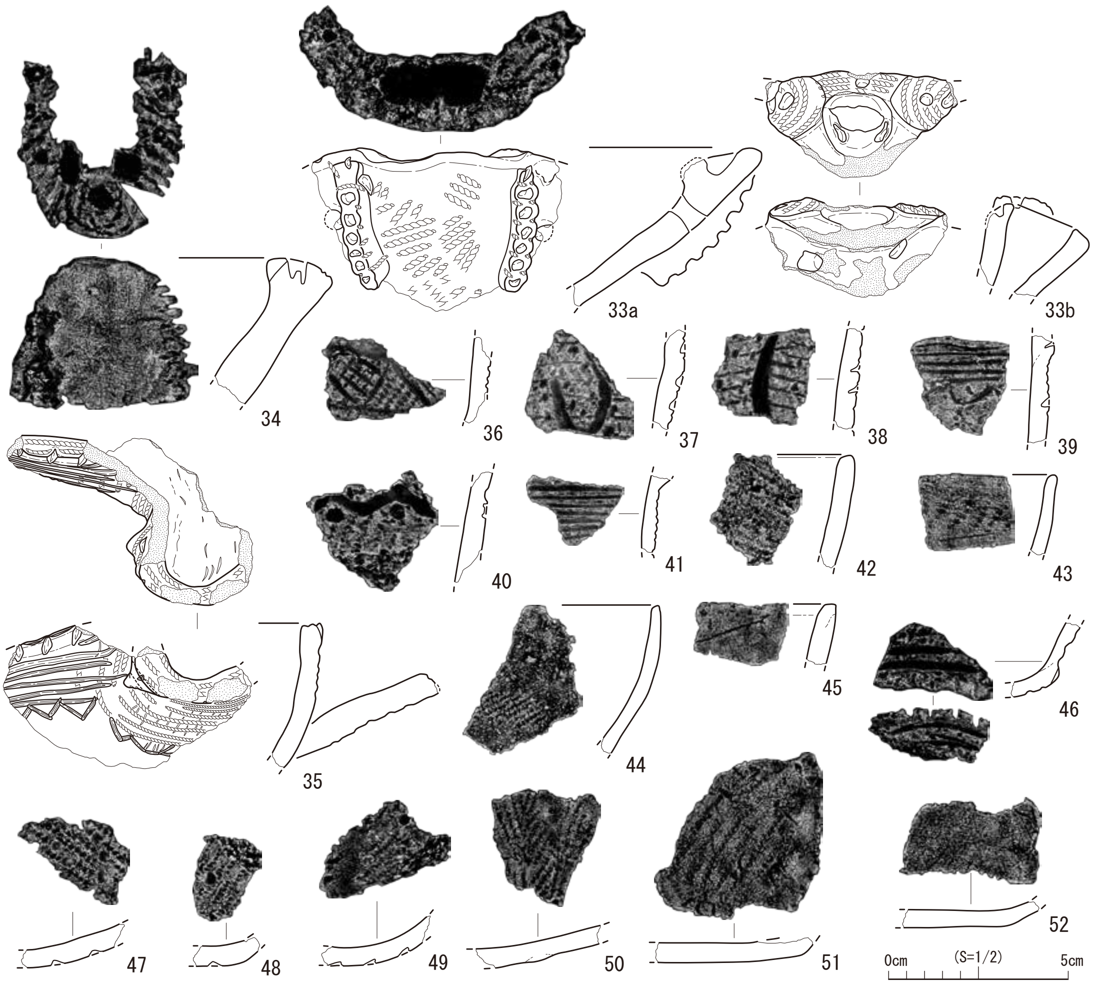
第Ⅱ群は十勝Ⅵ群２類である。十勝地域の北筒式についてはいくつかの集成や考察がある（山原2001、大矢2007）。全体形は不明だが、十勝川温泉1遺跡（石橋1997）などの出土例に類するものである。

第Ⅲ群は本資料の大部分を占める一群である。１類は十勝Ⅶ群に相当する。十勝を含め道東部には未だ類例がなく、その特徴から非在地産の亀ヶ岡式土器である可能性が高い。澤はこの土器について大洞Ｃ２式相当のものであるとの見解を示したが、それよりも古段階のものと考えた方が妥当である。

在地の土器である２～８類は、縄線文や刺突によって文様が施される５類が多く、６類のような格子文や渦巻状文が描かれるものは少ない。また、５類は由仁町川端遺跡（土肥ほか1996）にみられるような片口または注口付き浅鉢に類似するものがあり、多様な器形を含む。十勝編年に当てはめると、Ⅶ群２類からⅧ群２類に至るまでの時間幅を持つと考えられる。

新得町内において発掘調査事例は少ないが、屈足11・12遺跡（森内2000）からは第Ⅲ群４類や５類にみられるような土器が出土している。また、未報告ではあるが、上佐幌地区周辺の採集資料もほぼ同様の時期に当てはめることができそうである。第Ⅲ群はいくつかの変遷過程が追えそうではあるが、今後、資料の増加を待って検討・考察を行っていきたい。

澤はかつて、幣舞式の編年的位置付けを検討する上で、第Ⅲ群土器をその指標の一つとして挙げた。幣舞式については、全道的にその類例が増加してい



※遺物番号内のアルファベット小文字は同一個体

第３図　採集土器２

る一方で、型式設定に用いられた遺物について詳細な資料提示はなされていない。そのような背景の中、本資料は道東部における縄文晩期の土器についての一様相を示すとともに、幣舞式の吟味・再検討を行う上で学史的にも重要な資料であるといえよう。

〈参考文献〉

石橋次雄ほか編　1989『屈足B遺跡』新得町教育委員会

石橋次雄ほか編　1997『音更町十勝川温泉Ⅰ遺跡』音更町教育委員会

大矢義明編　2007『共進2遺跡』音更町教育委員会

北沢　実･大鳥居千鶴　2009「十勝地域の縄文土器概観」『帯広百年記念館紀要』第27号　p1-26

北沢　実2011「十勝地域の縄文土器概観（2）」『帯広百年記念館紀要』第29号　p16-23

澤　四郎ほか編　1963「第2篇　北海道阿寒町殉公碑公園遺跡発掘報告」『北海道阿寒町の文化財　先史文化篇』第一輯　北海道阿寒町教育委員会　p45-64

土肥研晶ほか編　1996『川端遺跡・川端2遺跡』由仁町教育委員会

松田　猛編　1998『武佐川1遺跡調査報告書』釧路市埋蔵文化財調査センター

森内幸雄編　1999『日進F遺跡』幕別町教育委員会

森内幸雄編　2000『屈足11・12遺跡』新得町教育委員会

山原敏朗編　2001『帯広・岩内1遺跡』帯広市埋蔵文化財調査報告　第22冊　帯広市教育委員会